

ワンダーフォーゲル部
遭難事故検証委員会

報 告 書

平成29年3月23日

ワンダーフォーゲル部遭難事故検証委員会 委員名簿

敬称略

氏 名	役 職
西原 達次	九州歯科大学 理事長
久藤 元	九州歯科大学 副理事長
林 正博	九州歯科大学 常務理事兼事務局長
日高 勝美	九州歯科大学 理事兼副学長
富永 和宏	九州歯科大学 理事兼附属病院長
木尾 哲朗	九州歯科大学 副学長兼歯学部長
柴田 宏	九州歯科大学ワンダーフォーゲル部OB会長
寺崎 良夫	福岡県山岳連盟 指導・遭難対策委員会担当理事

第1回 委員会（平成28年10月3日）

第2回 委員会（平成29年2月6日）

第3回 委員会（平成29年3月23日）

ワンダーフォーゲル部遭難事故検証委員会報告

1. はじめに

ワンダーフォーゲル部（以下「ワンゲル部」という。）部員4名（A、B、C、D）（注）が、平成28年7月27日から山中5泊6日での北海道大雪山・十勝連峰の縦走（以下「大雪山縦走」という。）を実施し、最終日である8月1日の下山中、3人（A、B、D）と1人（C）が別行動をとり、3人は下山したものの、1人となったCが道に迷い、崖から転落して死亡。（その後、地元警察は、道迷いによる転落事故死（直接の死因は脳挫傷骨折）と判断。）

（注） A：パートリーダー（3年）

B：サブリーダー（5年、元部長）

C（1年）、D（1年）

なお、パートリーダーは、以下「PL」、サブリーダーは以下「SL」という。

この事故原因及び再発防止策を検討するため、山岳知識豊かな外部有識者、ワンゲルOB会長及び学内関係者からなる「遭難事故検証委員会」（以下「委員会」という。）を設置した。

委員会のもと、学内関係者による「遭難事故検証部会」及び「クラブ活動在り方検討部会」を設置した。

委員会では、遭難事故検証部会報告及び関連学生からの聴取をもとに、主に次の3つの観点から事故原因を検証した。

- ① ワンゲル部の日常的活動（登山知識・技術の習得及び体力づくり等）は適切であったか
- ② 大雪山縦走等夏合宿の計画・準備が適切であったか
- ③ 大雪山縦走中のメンバーの行動やPL、SLの判断・指示等は適切であったか

さらに、再発防止については、ワンゲル部学生からの意見聴取、OB会で取りまとめられた意見、ならびにクラブ活動在り方検討部会報告等を踏まえて、提言することとした。

本委員会は3回開催され、3月23日、最終報告書を開示することを決定した。その前提として、クラブ活動における山の遭難事故は、「人のミス」によって起こるものであり、その原因や要因は部員個々の判断・行動が大きく関与しているとしたうえで、今回の遭難事故の原因分析を通じて、再発防止に向けて最大限活用することを本委員会活動の最たる目的とした。

さらに、大学生は、小・中・高校生と異なり、成人として自立した行動のできる人間であるという社会的通念に加え、本学のクラブ活動が自治会活動のもとで展開されていたことを認識したうえで、九州歯科大学の学生が安心・安全にクラブ活動を行えるよう、大学が一定の関与をすることが必要であるという意見で一致した。

2. ワンゲル部の日常的活動状況及び問題点

(1) ワンゲル部の活動状況

① 体力づくり

平成 28 年度は、4 月下旬からワンゲル部活動を開始し、週 2 回ペースで金比羅山等でのランニングを主メニューとする全体練習を実施していたが、5 月下旬の夏合宿計画の決定後は、パート毎においてもランニングを主とする練習を継続してきた。大雪山縦走パートでは、英彦山日帰り登山を一度実施した。

② 登山知識・技術の習得

登山知識・技術の学習機会としては、通常年に 1 回、30～60 分程度、上級生による山の歩き方等について説明会を開催していた。しかし、平成 28 年度は、年間計画には組み込んでいたものの未実施だった。

なお、近年の説明会において、登山技術、地形図や気象図の見方、トラブル時や天候急変時の対応方法など、山登りにおいて本来必須と思われるテーマの学習機会はなく、クラブ活動として登山における危険性の認識が希薄であった。

(2) ワンゲル部活動にかかる問題点

登山は自然を相手にしており、常に、リスク管理の意識をもって臨むことが前提である。そういう観点から、登山技術、地形図読図技術、気象知識、安全管理技術などの基本的知識を身につけるとともに、体力づくり及び技量にあった登山を繰り返す等、学習と経験を積み重ねることが重要である。

しかし、地形図読図や気象予想が出来る部員は少なく、GPS の活用や無線による登山中の緊急連絡等の検討が十分とは言えない状況であった。また、本格的縦走に挑む前に近郊の山での 1～2 泊の登山や近距離縦走を繰り返すなど体系的な取組みを実施していなかった。

このように、ワンゲル部の部員に山のリスクに対する認識の醸成、登山の知識・技術の習得や経験の積重ね等を行っていない日常の部活動自体に問題があったと言わざるを得ない。

3. 夏合宿の計画策定及び問題点

(1) 夏合宿の計画策定

① 合宿先・メンバーの選定、装備計画

ア 通常合宿先は、原則として PL らの協議やパートメンバーの話し合いで選定して

いた。一方で、顧問は部員に、慣例として、OB総会での話し合いを視野に入れた合宿先選定を求め、特に平成28年度は、ここ数年行っていない北海道に1パートは行くよう希望した。その後、ワングル部幹部の協議により、北海道（大雪山縦走）、北アルプス（奥穂高・槍ヶ岳）、八ヶ岳、白山の4パートの合宿先が選定された。

イ 合宿先選定と前後して、パートメンバー選定が行われた。この協議は例年通り学生間で行われたが、特段の選定基準はなく、学年の偏りがないこと程度で決定された。大雪山縦走チームについては、A及びBが希望し、PL及びSLとして選定された。次いでC、Dは大雪山縦走パートを希望し、Aがこれを認めた。

大雪山縦走パートの装備計画については、団体装備と個人装備に分けられていた。個人装備は、各人任せで、必携か任意かの指示や、相互チェック体制はなかった。地図は、一般的に持参される2万5千分の1の地図ではなく5万分の1の地図とコンパス1セットをPLが持ち、他の3人は手書きの行程地図のみだった。

② 顧問による合宿計画の承認

合宿先選定後は、PLが中心となって具体的な登山計画書を作成し、顧問と面談して承認を得ることとなっている。今回も顧問は、各パートPLとそれぞれ5回程度の面談を経て、行程の安全性や装備計画などをチェックし計画を承認した。

近年、このプロセスで、部員は顧問提出用の計画とは別に、短縮行程など学生主導の実地的な計画を策定し実行することが慣例化していた。事実、今回の夏合宿においても、大雪山縦走のパート以外の2つのパートでは、計画書ではテント泊となっていたが、実際にはテントを持って行かずに山小屋で宿泊していることが明らかとなった。

(2) 計画策定にかかる問題点

① 夏合宿計画全般の問題点

顧問用と実際用の2通りの計画書を作成するなど、顧問と部員間で率直な意見交換が行われていなかった。また、このことが、合宿後、行程の妥当性や山道のコンディション、危険箇所などに関する情報の共有化、先輩から後輩への引継ぎなど、ワングル部の活動がOB会との関わりも含めて形骸化したことは否めない。

② 大雪山縦走計画の問題点

大雪山縦走パート4人のうち、1年のC、Dは、山に関してはまったくの初心者であった。またPLのA、SLのBも年1～2回、夏山登山経験があるのみで、総経回数も4～5回程度しかなく、登山という観点からは初心者の域を脱していない。

グループ登山できわめて重要な案件であるメンバー間での縦走路や装備計画などの事前検討もほとんど行われていない。例えば、天候急変時用のツェルト等の装備、GPS、防寒着などの必要性をメンバー間での十分な協議及び相互チェックなどが必要であった

が、全般的に不十分であった。併せて、このようなことはワングル部全体に共通していることであり、常態化している実態が明らかとなった。

4. 大雪山縦走経過及び問題点

(1) 縦走経過

① 大雪山縦走パートの4名は、平成28年7月26日夜に、旭川に到着し、翌27日早朝、旭岳登山口を出発。

その後、北海岳、白雲岳（避難小屋）、忠別岳（避難小屋）、化雲岳、トムラウシ山、南沼（キャンプ地）、三川台、双子池（キャンプ指定地）、ベベツ岳、美瑛富士（避難小屋）、美瑛岳、十勝岳、上富良野岳を経て、山中5泊の後、8月1日十勝岳温泉に到着予定だった。

② 1日目（27日）は、旭岳を過ぎたところで雨が降り出し、次第に風雨が強くなった。このため、全員体力をかなり消耗しながら白雲岳避難小屋に到着した。

2日目（28日）、3日目（29日）は風雨が激しく白雲岳避難小屋に滞留（沈殿）。計画書では、天候悪化の時は、入山口へ引き返すこととなっていたが、管理人から天候は回復するとの情報を得て、トムラウシ山までは行こうと決めた。

4日目（30日）は曇り。忠別岳、五色岳を経由しヒサゴ沼避難小屋に到着。

5日目（31日）は晴れ。トムラウシ山までを往復することとした。途中ロックガーデンでCが「岩場が怖い」と申し出たため、その場で待つように指示して1人残し、3人はトムラウシ山を往復した。Cは、他の登山客から雨が降りそうとの情報を得て先に下りる旨のLINE連絡をして進んだ。このため4人が合流したのは待ち合わせ場所から数十メートル下だった。

6日目（8月1日下山日）は晴れ。午前4時ヒサゴ沼を出発し、トムラウシ山の手前、小化雲（ポンカウン）岳から天人峡温泉に向けて下山することとした。小化雲岳を過ぎたところから、下りが多くなりA、B、Dのペースが上り、Cが遅れがちになった。このため、小休止を挟みながら進んだが、Cは遅れては追いつくという状況が続いた。

下山口まで5km位のところで、Cが「自分のペースで歩きたいので先に行ってください」とAに言ったことを受け、3人は、Cを置いたまま下山することとし、10時15分頃天人峡に到着。

Cが下山しないので、14時40分頃、AとDがCを探すため再入山したが見つからず、17時に110番通報。

③ 8月1日夜、道警及び旭川東署が登山道を搜索するが発見できず。

8月2日も搜索が行われたが発見できず。

8月3日は自衛隊等も含めた大規模搜索が行われ、ヘリコプターが登山道から500

m程離れた崖下の沢で心肺停止状態のCを発見し、死亡が確認された。その後、地元警察は、事故原因は道迷いによる転落死、死因は頭部外傷と判断した。

(2) 縦走中の問題点

① 登山歩行について

ア 初日、白雲岳避難小屋手前で暴風雨に見舞われ、Aが生命の危険を感じたと述べる程の状況で4人は避難小屋に到着した。2日目、3日目も悪天候のため沈殿している。避難小屋に着いた時点においても、縦走を続けるか戻るか再検討すべきであるが、メンバー4人はその後の行程について話し合ったものの、結果的には十分であったとは思えず、パーティとしては正確に判断する能力に欠けていたと思われる。

イ パーティ行動は単独行と比べ、道の相互確認、ペース配分、精神的な支えなど多くのメリットがある。「平成27年山岳遭難の概況」によると、単独登山者の死者・行方不明者は複数登山の2.3倍、遭難原因のトップは道迷いで39.5%となっている。

山行の順序は、SLが先頭、PLが最後尾となり体力順に隊列を組むことが基本である。しかし、入山当初こそその順番であったが、初日の中途から、同順番は崩れ、思い思いのペースで行動するようになった。Cは初日から常に遅れがちとなり、例えば北海岳近辺では、メンバー間の距離はそれぞれ30m程度離れて、Cが最後尾となっていた。

5日目のトムラウシでも、Cを待たして3人だけが登っており、6日目のヒサゴ沼分岐でも、PLは「すぐ頂上だから先に行ってくる」と声をかけCを1人にしていく。

② 遭難事故日の3人と1人の別行動について

縦走6日目の下山日、メンバーは疲労が蓄積していたと思われる。このような中、CからAに対して、「先に行ってください」との発言があり、それを聞いたB、Dもさしたる疑問も無く、Cを1人残し先に下山した。

PLとしては、メンバーを1人にする危険性を認識し、パーティを分裂させないこと、メンバー全体の疲労度に対する配慮を念頭に、全員での下山という原則を守らねばならないが、今回、残るメンバーのB及びDの3人がこのような判断に至った経緯は理解しがたい。しかし、繰り返しになるが、ワングル部では、このような基本的な訓練がなされていなかったのが、ワングル部構造的な問題点と言わざるを得ない。

5. 事故分析のまとめ

一般的には、登山における遭難事故分析を行う際、本質的問題として「登山のリスク」と「登山者本人の自己責任」を明確にしたうえで、どこに原因があったのかを明らかにすることが重要であるとされている。本委員会では、このことを踏まえ、その背景にある事象を含

めて考察し、「再発防止」につなげることが重要であるという意見で一致した。

当大学には、文化会系が 13、体育会系が 18、合計 31 のクラブ活動があり、ワングル部は、文化会系として位置づけられている。詳細な理由は不明だが、文化会系のほうが大学からの部費補助割合が高くなるためと、ワングル部員が理解していたと思われる。あるいは、自治会が、勝敗が明らかになる運動部と予算配分で区別してきたということもワングル部員の意識の中にあっただけとも考えられる。

いずれにしても、文化会系というイメージから、部員の中には「楽しく旅行に行く程度の部だと思って入部した」、「他の体育会系の部とは違ってきつくないイメージがあった」などの声があり、ワングル部員間に意識のズレが生じ、それによりクラブ活動が大きく変化した。

さらに、山登りにとってきわめて重要な山の知識、技術の習得、体力づくり及び、簡易な山から本格的な山への計画的かつ順序だった登山経験の蓄積が断たれ、顧問と学生間の有機的な検討がされないまま、本格的な縦走に挑んだことは否めない。

今回の事故の原因は、直接的原因という視点としては、Cの道迷い・滑落だが、メンバー各自の意識の問題や事前準備不足、リーダーシップの欠如、パーティの分裂などが挙げられる。しかし、複合的かつ潜在的な問題として、部員の山に対する意識の低下、OB会や顧問と部員との意識のずれやコミュニケーションの欠如、およびワングル部の日常的活動の低下を指摘せざるを得ない。さらに、学生気質の変化を察知し、適切な対応を取らないまま、ワングル部活動の支援を続けてきた顧問を含めOB会の活動の影響も否定しがたい。

6. 再発防止

(1) 第1に、ワングル部をどのような部として位置づけていくのか、すなわち、文化会系として、例えばハイキング部的なものとするのか、あるいは体育会系として山に真剣に向きあう部とするのか、部員たち自身が自主的にワングル部活動の理念と方針を考え、明確にする必要がある。

第2に、仮に後者を選ぶならば、ワングル部活動のあり方を抜本的に考え直す必要がある。そのためには、登山に関する外部有識者の継続的かつ有益な助言や指導、その支援にOB会の一定の関与が必要であると考えられる。

今回、OB会から、今後の活動再開に際して、①登山技術の講習、②外部講師やコーチ、アドバイザーの招聘、③体力づくりのバックアップ、④新人教育や危険学習、⑤計画書、報告書のOB会によるチェックと評価など多面的な提言が出されている。この提案をもとに、現役ワングル部学生と真摯に協議することを切望する。

(2) 大学はこれまで、学生の自主性を重んじて、自治会活動としての部活動全般を通じて支援してきたが、学生の安全性に関して、今後は自治会活動を通じて一定の後見的な関与が必要である。今回、クラブ活動在り方検討部会から、「九州歯科大学クラブ活動支援に関わる規程（仮称）」を制定して、クラブ活動における顧問教員や指導者の役割、

大学として学生全員が加入している傷害保険に加え、クラブ活動に応じた任意傷害保険への加入を含む安全管理体制や緊急時連絡体制の報告義務、遠征時の事前届出制、顧問教員間の定期的な意見交換の場である顧問会議設定等が提言されている。大学に対しては、ここで提言された内容を実際の運営につなげていくことを求める。併せて、体育会系クラブの部員に対しては、大学附属病院の機能を活かした健康診断の実施について検討することを提言したい。

7. おわりに

ワングル部においては、今回の遭難事故を猛省し、今後の活動理念・方針を自ら策定し、本委員会の提言のもとで安全性に十分配慮した活動を行っていくことを強く要望する。

現在、ワングル部活動を休止しているが、本委員会の指摘を踏まえて、ワングル部自ら再開の是非を判断することを求める。ワングル部の活動方針が策定された後、ワングル部の今後の活動に関しては、活動の再開に向けて十分に大学と協議したうえで決定されることを強く要望する。